

2024 年 7 月の総評に代えて 高橋修宏

鯨が鳴くと
死んだ仲間の骨が光るらしい
君の背骨が光り始める

長谷川柊香（宮城県）

三行目、「君」と呼びかける相手は、鯨の仲間なのか。いや、われわれも、やがて「君」のように「死んだ仲間」となっていくのではないか。「光る」というシンプルな修辭に、ある崇高な美しさを感じる。

追われても
追われなくても来る明日
伸びた分だけ
爪を切る夜

まちりこ（埼玉県）

「爪を切る」という身体的な行為だけが、作中主体にとって時間の経過をはかる確かさとして認識されているのか。「追われても／追われなくても来る明日」に、現代らしい乾いた無常感さえ漂う。

うまれたての雲を
両手におどらせる
ようにあなたはピアノにふれる

さいう（石川県）

三行目の「ように」は、明白に直喩の表現。だが、その前後に置かれた言葉は、たとえば／たとえられる、ということを超えて、どこか交換可能な審美的とも呼べる修辭となっている。

羊水に還るひかりか日向水

田崎森太（東京都）

生誕に関わる「羊水」と、「日向水」という日常的な事物との取り合わせが過不足ない。「還るひかり」の発見によって、その二つに美しく、はかない橋が架けられた。

地肌揉むと地肌動くぞ夏の星

吉沢 美香（宮城県）

もしや、髪を洗うシーンなのだろうか。ざっくりとした把握でありながら、その身体的な実感に、確かなリアリティが宿る。頭上に広がる「夏の星」の選択も、ぴったりだ。

洗濯のまっただなかにある裸足

日下部 友奏（群馬県）

おそらく、原初的な「洗濯」の光景ではなかろうか。電気洗濯機などが導入されるはるか以前、人々はみな自らの身体をフルに使って「洗濯」をしてきた。この一句の「裸足」から、われわれは遠くまで来てしまった。

夕方が来るから窓を開けなさい

azusa（京都府）

「夕方」という時間が擬人化されている。われわれが、普段〈朝が来る〉、〈夜が来る〉と何気なく使ってきたことに気づかされる。だが、「窓を開けなさい」と言われたとき、何者かがやってくるような不思議な気配が漂う。

この袖の端からここまで宇宙です

わたしと旅をしてくれますか

雲理そら（大阪府）

「ここまで」が具体的に明示されないにも拘らず、「この袖の端から」によって、どこか身体的なリアリティを伴った宇宙のイメージが淡く立ち上がるようだ。

咲いてから花だとわかる夕さに

ボーカロイドの間違える歌詞

藤井 柊太（神奈川県）

まず二行目が、面白い。「ボーカロイド」であっても、生身の人間のように歌詞の間違いを犯すものなのか。また、一行目の「花だとわかる」までの認識の遅延も効いている。

本も食事も同じ机の花野です

奥井 健太（滋賀県）

おそらく、「花野」は姓なのだろう。だが、秋の季語である「花野」と入れ換わってしまうような感触。それが、この一句の眼目か。

みんな眠くて柔らかい椅子

日比谷 虚俊（群馬県）

午下りの教室、あるいは職場の光景なのだろうか。江戸川乱歩の小説に〈人間椅子〉というエロティックな短編もあったが、この一句では誰もみな「眠くて柔らかい椅子」に変容してしまったようだ。

大人とは

知らないうちになんて

祭り屋台で気付いたりする

冬村窓果（兵庫県）

もしや、「気付いたり」することは、われわれの予測などを超えて、不意にやって来るものなのだろうか。時も場所も選ばず不意打ちのように〈気付く〉こと、その認識の不思議さに迫った快作。